



春に想う、 大学で学ぶということ

熊本県立大学長

堤 裕昭

Tsutsumi Hiroaki

春が訪れ大学の新年の始まりに、学生諸君には大学で学ぶ意味についてあらためて見つめ直す機会を持っていただくことを願います。所属する各学部で、それぞれの分野の知識や技術を学ぶことは第一義的に求められることですが、それだけでは将来の社会で十分に対応できなくなる時代が到来しつつあります。IT技術が日々急速な発展を遂げています。その中で、皆さんはスマホという情報端末を持ち歩き、多様な情報を利用しながら、日々便利になる生活を享受していることでしょうか。近年ではAIが我々の生活に必要な情報を先回りして収集し、瞬時に提示してくれる環境も生まれています。前世紀で言えばまるで多くの侍従^{かしず}に傅かれたような生活です。ところが、それは市場の需要を調査し、その需要を満たす物資を調達し、必要な機器を開発して市場に供給する作業と共通することであり、今まで人が仕事としてきたことが、AIやAIの制御する装置の作業に置き換わりつつあることを意味しています。

このような社会変革の中で、我々はAIと向き合い、うまく利用しつつ、AIを上回る位置に自分自身を置

く努力が必要となってきています。AIと計算力を勝負してもその速さに追随できません。AIは世界中のインターネット網を利用して瞬時に情報を収集・解析して提示することもできます。ところが、それらは常識を集めたもので、新規性や創造性に溢れたものとはなりません。我々の脳神経回路の長さは約100万km、地球25周分にも相当します。その回路の中で様々な信号が錯綜することで、新しいアイデアや考えが生み出されてきました。そうです！考える力です！これは人間にしかできない能力です。

大学で学問を学ぶ時には、既存の知識や技術を修得する受け身の作業を多く含みますが、その学びをもとに「考える」こと、それを通して新しいことを見出す、見出そうとすることが、学びの上での重要度を増しているのではないのでしょうか？また、「三人寄れば文殊の知恵^{ことわざ}」という諺があります。3人それぞれが持つ100万kmの脳神経回路を組み合わせることで、さらなる新規性や創造性が生み出されるということでしょう。皆で学問を語り合いましょう。